

Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(3)

古 田 榮 作

前稿において、熊本洋学校で日本で初めて男女が席を列して同一内容の教育を行ったことを明らかにした。たった二人の、また例外的処置によるものではあるが、実質的な男女共学の嚆矢であった。この男女共学について、当時この二人(徳富初子と横井宮子)と講筵を共にした徳富蘇峰は「余自らはゼンスに對しては、好意も持たなかったが、我姉——湯浅初子は、その従妹横井宮子と與に、ゼンス夫人の門人であった。されば予も全く没交渉という程でもなかつた¹⁾。」と少々冷徹に見ているのみであった。蘆花も「其頃もう洋學校に通つて居たつせ子の女みや子、久子の四女初子の英語修行と共に、肥後女學の黎明であります²⁾。」と熊本洋学校が女性に門戸を開き、そこで徳富初子と横井宮子の二人の女生徒が英語を学んでいたという事実を指摘しているに留まる。

本稿では「熊本洋学校」の名を後世に轟かせている「熊本バンド」の結成の経緯をジェーンズの回顧録を中心に考察する。

蘆花は評伝『竹崎順子』の中で次のように書いている。

明治七年には醫學校は廢止になりましたが洋學校はますます繁昌しました。此年にゼエンスの契約期限が來てあはや廢校の危きに瀕したのを、舊藩主細川護久が私費を出して、學校を繼續させました。而して明治八年の七月には、第一回の卒業生が十一名出ました。小楠門下の安場保和が水澤縣令時代に後藤新平、齋藤實と共に給仕から選抜した三秀才の随一人で後同志社教授で早世した山崎爲徳、小楠の嗣子時雄、工學博士中原淳藏、農學博士横井時敬、小崎弘道、法學博士浮田和民、小楠門下山田武甫の嗣子山田謙次、岡田源次郎、隈部閻一郎、市原武正などが其中に居ました。

然るにゼエンスは大變な事をしました。洋學校生が英語を習ひ、日新堂竹崎茶堂を初めとして實學連が文化生活の知識をせつせと吸収して居る間に、ゼエンスは飛むでもない耶蘇に其學生を導いてしまいました。ゼエンスの父は軍人で且熱心な基督教信者で、プレスビテリアン教會の長老でありました。子のゼエンスは耶蘇教は形式的なものではありませんでしたが、眞面目な信仰でした。ゼエンスとしては、假令自國の文化のすべてを日本に傳ふる共、其根柢と信ずる耶蘇を傳へずに歸つてしまふ事は、

所謂櫃を與へて壁をとゞむる心くるしさを感じたのでありました。彼は日本の青年を愛したので、自己の愛する耶蘇を彼等に與へました。其熱心は青年學生を捉へずには居ません。追々信者が出来ました。すべてが英語でしたから、ちよつとは人目人耳に立たずに進行しました。而して父兄が氣づいた時は、其信仰は牢乎として抜く可からざるものになつて居ました。

これは青天の霹靂です。西洋文化の吸収に先駆けた實學社中でも、これには全く不意をうたれてしまいました。而して其大それた耶蘇教の信奉者中に、横井小楠の嗣子時雄³⁾が居た事は、社中一同の驚駭と落膽でありました。

「肥後の維新」と形容される維新後の肥後藩の藩政改革とそれに引き続く廃藩置県により県政の中枢の座を占めたのは旧実学派といわれる、山田武甫、林秀謙、竹崎律次郎、徳富一敬らであった。旧実学派が熊本洋学校を設置したのは「明堯舜孔子之道 盡西洋器械之術 何止富國何止強兵 布大義于四海耳⁴⁾」の辞で代表される横井小楠の唱えた和魂洋才の有為の青年の育成の為であり、熊本洋学校は「皇國の御用に立つ可き東魂西才の青年に仕立つる爲に俊秀をすぐつた云うはば平和の士官學校⁵⁾」として構想されていたのであり、そこからキリスト教徒への改宗者を多数出したことは、蘆花もいうように「士官学校生徒が平和論者に改宗した」という「青天の霹靂であり」、熊本洋学校の設立・維持・存続に尽力した者に驚駭と落膽を与へずにはおかなかつた。県政の中枢にこのような衝撃を与えることになった「熊本バンド」の結成への経緯はどのようなものであつたのか。「熊本バンド」の一員である小崎弘道の回顧談によれば

「チェーンズは始めの間は生徒に對しても一言も基督教の事を語らなかつた。三年を経て生徒が稍英語を解し得る頃一日理科の時間殊に天文學を教授する際、宇宙の洪大無邊なる事や秩序整然たる事を説き示して、此の天地は偶然に斯く成立した物であらうか、何者か之を主宰する者があるのではなからうかと云ふ如き質問を起し、天地の神秘を以て有神の信仰の自然なる事を語り、又或時は歴史や英文學を教ゆるに當り、欧米文明の基礎は基督教の信念にある事を述べて聖書を理解するの必要を示し、若し有志の生徒にて聖書を學ばんと欲する者あらば一週に一夜自宅にて之を教へてもよいと勧誘した。其結果毎水曜日の夜三四十名の生徒は彼の宅に集り聖書を學ぶ事となつた。」と宇宙の秩序を説くべき天文学の教授を端緒としてキリスト教の理解が、西洋文化の理解に不可欠であるとして、聖書の共同學習が始まつたとした上で、生徒の間に賛成派と反対派の發生を「始めチェーンズが此勧めをした時生徒の間には議論が二つに分れ、一方には彼の言に従ひて聖書を學ぶべしと云ふ者あれば、他方には又如何なる理由ありとも異教を學ぶは爲すべき事でない」と反対する者もあつた。私は反対者の主なる一人で、儒教主義を標榜して居た所から論語に「異端を攻るは斯害のみ」（「子曰、攻乎異端、斯害也已矣」為政）とあるのを楯として反対を唱へたが、賛成側の生徒は、よし宗教には反対でも欧米

の文明と文學とを理解する上に聖書の知識は必要なるのみでなく、語學の研究にも利益が多いから之に出席するは適當なる事であると主張した。私は又、眞心を以て學ぶのでなくして單に文學や語學習得の便にするのは師に對しても敬禮を缺き紳士の所爲ではないと攻撃した。然るにデエンスの許に出席する生徒中には研究の結果信仰を起す者續出し、一年餘の後には彼の宅に於て日曜の禮拜説教を行ひ又祈禱會を開き續々信者が出來た。」と生徒の間の対立および聖書の共同學習を通じての信者の誕生を語っている。

また、金森通倫は京都同志社において開会された、第一回夏期学校での回顧談の中で次のように言っている。

同氏 (=ゼンス氏) 來テ英學校ヲ開ク 當時日本未ダ開ケズ肥後未ダ頑固ニシテ基督教ナンドトハ心ノ中否心ノ隅ニモ存セザリシナリ 倭熊本ニ來リ英學校ニ入りテ教授ヲナセシガ半分若クハ三分ニ以上ハ皆粗暴ナル熊本青年ニシテゼンス氏ハ全ク日本語ヲ知ラズ 余輩ハ全ク英語ヲ解セズ 双方相通ゼズシテ自ラ教授セラル明治五年六年七年殆ド三年間ハ斯ノ如クニシテ過ぎ去リ 三年ヲ經テヤ、會話ヲナスニ到リ頗ル英書ヲ讀ムヲ得ベシ 而シテ此時迄ゼンス氏ハ一言一句モ基督教ヲ説カズ 只管懇切ニ我子ノ如ク我等ヲ教授セラル 先ズスペルリングヨリリーダー地理書等自分等ノ好ムガ如クニ教ヘラル 當時氏ハ外國人ナレドモ氏ヲ見ル外人ノ如クナラズ 實ニ我ヲ愛スル師我ヲ思フ父ノ如キナリ 一言モ云ハザル中ニ既ニ吾人ノ心ハ氏ニ嚮ヘリ 氏ヲ愛シテ氏モ亦益々親愛ヲ加ヘ我等ヲ教授サル、ナリ 明治七年一月頃ナリシカ氏始テ今ヨリ聖書ヲ教ユル故我家ニ來レヨト告ゲラリタリ 固ヨリ我等ハ聖書ハ恐シケレド先生ヲ信ジテ行キタリ

既ニ行クヤ此語彼句ヲ記憶スベシト云ヒシガ故ニ又タ先生ヲ信ジテ其言ノ如クセリ 約翰傳三章ニコデモノ話ノ如キハ當時能ク記憶シタリ 明治八年四月春ノ頃門弟中少シ心ノ動キ始メタルモノアリ 先生聖書を讀ミ又タ我等ト祈禱ヲナスニ其祈禱ヤ随分長ケレバ我等中途目ヲ擧ゲ之ヲ視ルニ兩眼閉ヂ其周邊赤紅ヲ呈セリ 我等是ヲ視テ可笑シクシテ只微笑スル耳 然ルニ先生ノ兩眼ハ落涙潜然是實ニ我人ヲ愛スル熱淚ニテアリシナリ 我等之ヲ見テ「西洋人モ亦泣ヲナス乎」ト笑ヘリ 而シテ先生ハ尚ホ未ダ基督教ヲ信仰セヨトハ云ハザルナリ 八年ノ頃心ノ動キタツモノ頗ル生ジ或人ノ如キハ信仰スル傳導スルトト云ヒタランニハサゾヤゼンス氏ノ大悦ヲ引き或ハ洋行デモ爲サシメ呉ル、モ計リ難シト氏ガ宅ニ至リシニ豈圖ラニヤ 先生叱シテ曰ク 汝ノ如キ其精神ニテ傳導ナドナスヲ得ンヤ 宜シク歸リテ勉強スベシ ゼンス氏來リシヨリ四年則チ明治八年ノ夏頃心動キ終ニ基督ヲ信仰スルモノヲ生ジタリ 而シテ之ト伴テ基督ニ反對スル者生ジタリ 一方ハ基督ヲ信ジテ他ノ頑固ナルヲ唱ヘ一方ハ大學論語ヲ説テ他ノ西洋ニ流ル、ヲ嘲ケリ 斯ノ如ク朋友間ニテ大ナル爭論起リタリ 而シテ最モ十分ニ基督教ニ心ヲ傾クルニ至リタルハ八月頃ヨリ日曜日ノ朝三時間位引續キテ

説教セラルコトナリ 抑モ彼學校ニテハ六日勉強シテ第七日ハ道德ヲ養フ日トナシテ漢學先生ノ處ニ到リテ大學論語ノ講釋ヲ聞クコトナリ斯ノ如クゼンス氏ハ午前ニ説教ヲナシ午後ニハ漢學先生ノ講釋アリ 最始ニハ兩方共ニ面白クシテゼンス氏ヲ聞ケバ誠ニ感心スベク漢學先生ヲ聞ケバ又一言ナシ 彼ト此トノ中間ニ迷フコト殆ンド半年間既ニシテ孔子ヨリゼンス氏が面白クナリ或人ノ如キハ漢學先生ノ講義中笑ヒタリトテ絶交セラレタルモノアリタリ 此時多少ノ信者ヲ生ズ 翌年春十日間ノ休暇アリタレバ如何ニ費スベキ乎トゼンス師ニ問ヒシニ是好機會ナリ 諸君此十日間聖書ト祈ニ用ヒヨク教ヘラレタラバ之ヲ聞テ(敢テ云ヒマスガ) 此時ハ未ダ小崎ハ不信者ナレバ何卒彼ヲ導カン 而シテ之ヲ導ク一人ニシテ呼ブモ來ラヌ故一會ヲナシテ此處ニツレ來ラバ必ズ來ルベシト 斯テ十日間聖書を讀ミ祈禱ヲナス 是レ則チリバイバルノ始ニアリシ其終ルヤ書生歸リテ烈火ノ如クニナリ 當時未ダリバイバルノ何物タルヲ知ラズト雖モ何故カ其時ニ信仰セシ人々は堪ユル能ハザルニ至リ十三歳位ノ童兒モ堂々誰人ヲ問ハズ道ヲ説ケリ故ヲ以テ學校始マレド勢ヒ課業ニ付ク能ハズ 教師ニ就テ暫時休暇ヲ乞ヘリ 食堂ニモ講堂ニモ部屋ニモ廊下ニモ到ル處五人七人一團ヲナシ聖書ヲ讀ムアリ神ノコトヲ話スアリ 此時或一人ノ兄弟云ヒ出シテ曰ク 是レ所謂聖靈ノ働キニ非ズヤ 他曰ク計リ難シト 行テ之ヲゼンス師ニ問フ曰ク 愚也 何ゾ斯ノ如キ怪事アランヤト 一月ノ間此働引續キテ其間或ハ教師カ馬丁ニ道ヲ説クモアリ或ハ小崎ニ勸ムルアリ 或ハ父母ヲ導クアリ 或ハ街道ニ説教スルモノ道ヲ行クノ老翁ヲ捕テ神ヲ話スモノアリ 斯クシテ一月ノ末トナリ四十人許リノモノ基督ニ獻身ノ盟ヲナサント欲シ之ヲナスガ爲ニ山ニ行カント欲シタリ 其他數十人ノモノニ行カント勸メシニ彼等モ今少シ決心シテ行クベキコトヲ答ヘタリ⁷⁾

金森は「外國人ナレドモ氏ヲ見ル外人ノ如クナラズ 實ニ我ヲ愛スル師我ヲ思フ 父ノ如キナリ 一言モ云ハザル中ニ既ニ吾人ノ心ハ氏ニ嚮ヘリ 氏ヲ愛シテ氏モ亦益々親愛ヲ加ヘ我等ヲ教授サル、ナリ」とその真摯な教授態度からジェーンズを信じて、「固ヨリ我等ハ聖書ハ恐シケレド先生ヲ信ジテ行キタリ⁸⁾」と聖書の共同学習会のために彼の居宅に向かったのである。

一方、ジェーンズは生徒との聖書の共同学習の端緒を次のように記している。

「学校の第三年目の早春のある時に、最上級の学級で『ピタゴラスの定理』の証明がなされた。この定理がすべての直角三角形について成立することが証明された後で、英国の小学生の間で広く唱えられている俚諺「驢馬の橋」に匹敵する⁹⁾」と言った。

これに続いて彼は机間巡回をしながら、

「いま証明された『ピタゴラスの定理』は常に且つ永遠にあなたが描きもしくは想像し得る無数の直角三角形についてすべて等しく真理であるということがあなたがたにとって極めて重要な事実であると思いませんか？」と問いかけた。当惑している生徒たちを前

にして更に続けた。

「この単純な直角三角形の斜辺の平方と他の二辺の平方の和の絶対的な同量ということが、過去、現在、および未来永劫において確立され維持されているということなのか」と質した上で、「容易に感知できるこの単純な定理は、あなたがたの幾何学で常に真理である。どこからこの厳正で、証明し得る真理は由来するのか？」と畳み掛けた。呆然としている生徒を相手に真理の幅広い適用を促しながら、「それではあなたがたの物理学がそれで始まる力学的な力の使用における力と抵抗の間の数学的關係がたった一例でも該当せずあなたがたを弄ぶことがないのはどうしてなのか？」「あなたがたの化学の、化学的な類似、化合と分解の方法と比率は常に数学的に真理としてまたこの定理の要素とその真理の証明のとして不変であり続けるのはどうしてなのか？」「あなたがたの幾何学は、宇宙そのものと大きさが等しく、地球の諸世界もしくは太陽系よりも大きいような想像できる壮大な大きさを扱うことも出来る。」「有機物および無機物の、化学的類似と物体の組成の事実は、顕微鏡では捉えられない原子に関係している。」「結果のすべてのこの無限の連鎖を通して；決して失われることのない間断なく反作用する巨大な力の；大きさ、重さ、寸法、原因と結果の關係の；人間の発明の才の広がりはいずれのところ、唯一の間隔の不規則性、単なる多辺のもしくは失われた連鎖を発見することは不可能であるのはどうしてか？」尚反応も、同情的な様相すらなかった。混み合っている座席のすぐ前に身を置いて、教師はこの（畳み掛けるような）質問の仕方をトーン・ダウンさせて、感情を抑制して、冷ややかで権威的で、教授的な調子を装った。「諸君、」と彼は言った、「私はあなたがたに、この命題が、時々ではなく、都合のよい時折ではなく、常に、変わることなく、また永遠の真理である理由をお話ししましょう。」「私はあなたがたに原因と結果とが、あなたがたが生涯の思考を事実に基づかせ決して落胆させないほど不変的に連結している理由をお話ししましょう。」「私はあなたがたに、あなたがたの幾何学で真理であるものが、あなたがたの生理学、あなたがたの物理学、あなたがたの化学において取り扱われる現象についても同様に信ずるに値する理由をお話ししましょう。それは、この世界、この宇宙が、法則と秩序ある場であるからです。それは偶然の余地がどこにもないほどに、法則が普遍的であり、秩序が不変であるからです。たった一つの原子も偶然の場や目的をもつものではありません。あなたがたと私が単なる原子にすぎない宇宙において偶然のものはありません。」「私にとって、原因と結果の法則、秩序および統一性のこの普遍的な領域は、最初の目的の事実、無限の要求に見合った一つの力、ローマの歴史家が{自然のすべての枠組みを：永遠で、無限で、また変化もしえないし衰微に従わないものであるが：指導し支配する}ユダヤの神について言ったように{偉大な支配する精神}のような私の人間精神の類似を通してのみ想像することのできる知性を、示していることも付け加えておきましょう。¹⁰⁾」

と洋学校の生徒である小崎が聖書の共同学習の端緒を天文学の授業としているのに彼はそれを「ピタゴラスの定理」の空間への適用および諸自然科学的な法則の由来としており、両者の間にニュアンス的とはいえ差異があることを示している。だが、これに続いてジェーンズは

その時に反応があった。「神」という単語が発語されるとすぐに中間の長椅子に腰掛けていた生徒が——彼の浅黒い顔は怒りで一層浅黒く、眼をかつと見開き、息づかいも情緒的動揺で荒々しくなっていたが——前屈みになって言った「先生、それは嘘です。私たちは信じません。」それは小崎であった。憤慨しての「批判」で教師は一瞬虚栄を張ったが、すぐにおさまったものであったといえるが、小崎と同じく即座に生じたものであるが、ずっと深遠なものであった。「あなたは儒教信奉者、すなわちあなたがたの天皇、あなたがたの両親、およびあなたがたの友とが、あなたが彼らに負っている関係と義務においてあなたがたの教えを組織している中国の聖人の崇拜者であるが、あなたは敢えて私をこのような無礼な態度で私に接している」というのが彼への返答の言葉であった。しかしこの指示で十分であった。宗教上の誇りと敵愾心、弁解の素振りをどこにでもある宗教と道德の体制の下ではありえないような欲望は、すべての部署でその見解が理論を持っていない性急な人では問題となり、確信させる時には特別に、容易に産出させるのである。¹¹⁾

と記述し、宇宙の創造神に反応する小崎の姿を鋭く捉えている。当事者の二人の（聖書の共同学習の端緒の）記憶の差異はいずれかが正しいかは確かめようがないが、小崎のキリスト教に対する頑なまでの態度は「實學黨の連中は、畢竟己の後嗣者をつくらんが爲に洋学校の創立に骨折り、維持にも骨折った。されば洋学校の連中もその系統からすれば、悉くとは云はぬが、大多数は、實學黨の色彩を帯びたる者のみにて、その重なる者共は、日曜や休日には、竹崎先生の會讀とか、その他實學黨の諸先生の宅へ教を聴きにゆく者が少なくなかつた¹²⁾」という洋学校の生徒の雰囲気から当然の態度として浮かび上がってくるものといえよう。蘇峰も「當時洋学校の第一回の入學生は卒業してゐたが、彼等は他に行くところもなく、尚ほ學校に止まつてゐた者があつた。その中でもゼンスの最も氣に入つたる生徒は、余の從兄の横井時雄、又その次の級には、余と縁續きである金森通倫などがあつた。小崎弘道氏は今でこそ牧師であるが、彼はその時迄は最も熱心なる實學黨の仲間、寧ろ耶蘇教嫌ひであつたと思はるゝ。初めは上級生のみであつたが、追々下級生より新入生にも及び、集會の時にはゼンスの應接間は人で一杯となつた。而して後には學校以外の人さへも出掛けて來た。」¹³⁾と回顧しており、ジェーンズの人柄に触れ、彼を人間的に信頼し、彼の設定した聖書の共同学習会にも参加した「西教派」¹⁴⁾とそれに反対する「正義派」が熊本洋学校生徒の間に歴然と存在していたのである。

こうした中で聖書の共同学習が続けられ、キリスト教への信仰を固めていく者も生ま

れたのである。それは発展して日曜礼拝となっていくのである。

ジェーンズは、聖書の共同学習会の中で以下のような告白を行なう。回想録によれば、熊本洋学校の第三年目に（＝明治七年夏頃）に

「しかし一つの体系で真理であるものは同様なすべてのものに対して真理である。それらは、それらが彼を助けもしくは彼に利益をもたらし、もしくは彼を快適にし、もしくは彼を鼓舞する限り、人間から生じた人間のためになる。しかし割れ、もしくは擦り切れ、もしくは汚れた器具のように、それらは人間自身を汚す汚物の残存物を洗い流し人間の発達の低次の段階に置かれている基礎と不名誉な使用を他のより善い人に忘れさせる軽蔑の最新の溝のためである。というのは、それは保護され、啓蒙され、解放されている——墮落し隷属するのではなくて——べき奉仕されるべき人のためのものであるから。宗教的であれ、政治的であれ、社会的であれ、制度はどれもこれも皆、その存在、要請および儀礼の微細な事項に至るまで、人間のためのものである；人間は組織のためのものではない。」また自明的な真理であると見えるもののすべてのそうした繰り返しに対しては論理的なものは変わることなく避けられ論点は多かれ少なかれ不可避の難問によって鈍いものとされる：「またキリスト教も——この同じやり方でキリスト教を考えるのか？」

そしてとうとう、ひとつのこうした状況において——もちろん執務時間と授業時間以外の時間で——西洋の宗教と東洋のそれとの間になされてきたかもしくはなされ得る唯一の区別がなされた。「どうしてそうでないのか？」とありったけの熱意を込めて言われた。「どうしてキリスト教が他のすべての宗教と同じようなものではないのか？これらの制度の残りに対してひとつの制度の中で特殊なものは——特別に善で、特別に真で、特別に持続する——持続するだろう；人間のためにそれを地上から滅ぼさせてはならない。しかし私に用語を定義する必要性をあなたがたに示させなさい。もし我々が彼が最も言ったらしく言いそうなものによって、また彼がすべての人間のありそうなことにおいて言わなかったしなかったもの以外で彼に帰されるものによって判断されるならば、幾千もの事物がキリストの思想の部分も場所も持たないキリスト教の名前で今まかり通っている。あなたがた日本の仏教を冷静に見ることであなたがたの精神に明確にこれを説明しなさい。その名前が日本の「仏教」を辱め汚す彼の高められた道徳的なおよび人道主義的な標準から——主義と無意味、偶像崇拜と道徳的腐敗がどれほど無限に遠くはなれていることか！今あなたがたの歴史に立ち帰りなさい。所謂「キリスト教」の創設と確立とを、キリストが決して公表せず恐らく考えもしなかった問題に敵意ある論争を始めること、および組織的で絶えることのない迫害の進展を思い起こしなさい。暗黒時代を思い起こしなさい。仏教徒の墮落よりも悪い生まれつきの、血で洗礼され、宗教戦争で養育され、崩壊と衰微の破壊的で組織を破壊し高度に慈善的な原理で犯された、宗教改

革を思い起こしなさい。わたしはあなたがたに、もしキリストがこの恥ずべき不面目な歴史に対する記述者で神の保証人として支持されるべきであれば、悪と共に並び立ち、残酷を感じさせ邪悪に富むのであれば、その時は彼は聖者で神についての教えそのものであるよりもむしろ怪物もしくは悪魔として支持されるべきである。またもしこの歴史が確かにそのすべてに責任を負うべき偽のキリスト教を代表する者たちの誤りによるものであるなら、我々は慈悲心をもってそのように必要とされた悪の作者を見ることができ、また嫌悪をもってまた彼らが設立した制度を毛嫌いして見ることができであろう；またそれを模造した本来のものへの代理物からの激しい嫌悪で逃げ帰ることができるのである。¹⁵⁾」

このジェーンズの告知は、「岐路」であった。現実と虚構、啓蒙と欺瞞、真理と遁辞、自然と超自然の岐路であった。新しい学年が始まり、生徒数も増加したために、ジェーンズは、教授者として明晰で有能な最上級生を「助教師」として任命し、新入生や下級生の授業を担当させた。ある土曜日のことである。

一週間の仕事が丁度済んだ時であった。市原（盛宏）が、彼は第一級の一員で、第二級と第三級で彼の専攻した学業で最も優れた成績を修めた者だが、(外国人教師の休息している部屋への)立ち入りに対する真摯な口実をもってはいたが、外国人教師が一時間の休息時間の休息場所としている暗くされた部屋に押し入ってきた。部屋にはすぐに明かりが点され、伝達者は自らの使命を果たそうと急いでいた。

「続けなさい、市原、弁解は要らない。どうしたら私はあなたの力になれますか？それは何ですか？」というのは、この少年が、性格がよく、身体的に強く精神的にバランスのとれていて、いつもキチンとしており無口で決して自己主張をしない少年だが、注意を引くのに最も価値のある少年だった。

「先生、私は、我々には全く解決できそうに思えない質問を；しかしわれわれの数人がそれに深い関心を持っているし、また、もし適切であるなら、彼らがそれをあなたに提出するよう私に頼んだ、持ってやってきました。もし不都合であるなら、我々はあなたにそれに注目せず、私が来なかった事にして下さい。」

更なる確認の上で、少年の遠慮はなくなって彼は本当に率直に事を打ち明けた。

「先生、我々はいろいろなキリスト教があることを知りました。我々はこの事実を多くの(情報)源から知りました。我々はあなた、あなた自身がキリスト教徒であると考えようになりました。我々全員があなたとあなたが我々に教えられたことに信じています。しかしあなたは決して特定のキリスト教の宗派について何も言われなかった。今われわれは多くのキリスト教があることを知っていますが、しかしわれわれはどれが最善のキリスト教かは知りません。我々は他のことには注目しませんが、しかし最善のキリスト教についてもっと知りたいと思います。先生、よろしければ、どれを最善のキリ

スト教とあなたがお考えになるかいつか教えて頂けないでしょうか？」

これが私への訪問者の言葉——繰り返してであり全部である。実際に、それは重大な質問であり；この面会へ導く観察の光の中では、表面上よりもずっと深い意味をもつものであった。明らかに私の周りの（人々の）精神は、無益な当惑の、単なる無知の硬化の、およびその観察を強制される場所ではどこにでも見られる宗教的刺激的の外部給費生への侮辱的な嫌悪の眠そうな、否定的な態度との倦怠からどんな手段であろうとも、覚醒されていたのであった。不安と高度な理念に対するまたよりよい道徳的な法典のより合理的な法令に対する憧れの欲望の感情は明らかにこれらのうるさくねだる（人々の）精神には耐え難くなってきた。

市原の質問はいかなる種類の先入観もしくは予想で下る断定のヒントをも含んでいなかった。彼の態度と彼に同行した生徒の態度は純粹な観照と探究の態度であった。彼の私自身に対する個格的な関係がそのように見られないならば、その状況での彼の言明のどの言葉にも唯一の同情的な強調はなかった。これらの少年たちの目的の真摯さのみならず質問態度にも示されているので、私はその礼儀正しい形態と同様に要請の政治的性質にも注意しなければならなかった。市原は私が答えるのを急かせないで私に対する彼の訴えをすることには急いでいた。質問が決して表面的な、束の間の、つまらないものではないこと、伝達者によって主張される、私の対話者の忍耐と洗練された敬意とが、最も確かな証拠であるので、私はいかなる確証をも必要としなかったのである。

「多くのキリスト教がある。どれが最善のキリスト教なのか？」そのような質問が、そのような源泉から、そのような境遇の下で正確に偉大な西洋の宗教の発展のこの現段階で提出されたのか？もしそうであっても、キリスト生誕暦の、1875年の九州の中心部にいる孤独な外国人教師に対してその助けを借りるようには一度も報告されてはいなかった。

「この質問に関心のあるすべての、友達を連れて来なさい。」私は言った。私が休息している明日の夕刻に私のところに来なさい；そうすれば私は、予備的ではあるけれども、直接の返答をあなたがたにしましょう。あなたがたの要請は合理的でありまた私がそれに投げうるすべての光に値する。私は全力を尽くしてそれに答えましょう。」

感謝に満ちた了解を表しながら、私への訪問者は退席した；そして私の方はといえば——そう、休息しようとして空しく椅子にどっかりと倒れ込んでしまった。しかしこの「多くのキリスト教の中での最善のもの」は私の耳の中で鳴り続けていた。休め！新しく得られた契りと自然に飢えていることの、何世紀もの間聖人の追跡者を回避してきたゲームの探究において私の乏しい能力を叩くこととの満足のための獐猛な借りでの鋭い論理で武装された、この率直な一団と共にか？そうした動揺で私の疲れ果てた精力の神聖な場所に侵入しているので、休息は考えられるはずもなかった。私が反省すればするだ

けそれだけ私ははっきりと目覚めてきた。記憶の群れが一団となって私の外皮で覆われた強さと目的にそれらが必要とする刺激を与えるようになってきた。¹⁶⁾

市原が出て行ってから一時間の間は、その間私は完全に眠っていなかったとしても、完全には目覚めていなかったが、夢を見つづけていた。というのは、次の日の朝に、新しい緊急の義務を告げる起床ラッパの音を聴いたので。宗教を教えること、もしくはすべての感覚の中で最も熱心で人間的だが忘れっぽいものに満足を与えることはここでの私の任務ではなかった。熊本での滞在がどんなに長くなろうとも、そうあってはならないと、私は決心した。しかし他の能力のすべてに対して人間性のこの積極的な育てるといふ視野の中でなされない教育の制度は完全なものはない。全自然を支配し人間のすべての義務と宿命を指令し得るそれ自身を示す感覚は、その事務所が、彼らが連合してまた各個に個人および人類に与えることのできる最善の任務のための全能力を発達させ強化する事である人々によって無視されることができなかった。その法外で排他的な放縦がそれをアルコールもしくは麻薬以上に全精神的で道徳的な構造に対して死んだように単なる酒にする傾向は十分な啓蒙の準備を与えることと同じく節制した授業を要求する。人間性と人間の努力とを適切な環境においてのみ高潔にし、鼓吹し、美しくする天賦の才能はその行使のために準備されたそうした条件を持たねばならないばかりでなく、啓発された理性と人間性の整合した感覚とによってその効用へと導かれねばならない。その制約を受けない、啓発されていない行使が人類に対する負わされている言われない恐怖がそれ自身に可能であることを示す感覚は；あの全ヨーロッパが貪欲な聖アウグスティヌスの時代から隷属の宗教的な承認とそれに代わる反乱の近年に至るまで不合理と残虐、誘発する不一致、論争、迫害、審問、殉教、魔女いじめ、および果てしない反科学の戦争を育て続けたが、教育が与えることのできる最も厳正な矯正を招いた。更に、アジアにおいて文明における進歩のその輝かしい約束のすべてを覆すことのできた感覚；かつて聖人の唇から出た最も卓抜し最も真正な教えを中性化した（感覚）；迷信、無知、偶像崇拜の悪夢にとりつかれているその幾百万の人々に重荷を課した（感覚）；そして献身の形態として発明された子どもっぽい人間性そのものを恥いらせるアジアで活動している教育者の手での全体的な改作を要求する。

しかしどの過程によってそれがなされるべきであるのか？それは血に飢えたヨーロッパの体制か墮落し力のないアジアの体制のいずれかを補強することによってであるか？信仰箇条、施設、および儀式への恭敬な態度を保持することによって彼らが持っている名前を残忍に裏切ったのか？もしくはこの不死の能力、人を区別するすべてのあの力の等しくて結合するものであるが、自ら恐怖と不合理な要求の餌食である人々の戯れになお留まるべきであるのか？

そうしたことが外国人教師がああ記念すべき日の暮れに心に受けとめた質問の一部で

ある。¹⁷⁾……

指定された時間の前に、市原は彼の訴えを補強する心づもりのある彼の六人の級友と共に私のところに戻ってきた。：山崎（為徳）、金森（通倫）、下村（孝太郎）、伊勢（横井時雄）、宮川（経輝）、海老名（喜三郎＝弾正）、不破（唯次郎＝唯次良）および浮田（和民）。何という記憶の洪水をこれらの名前は引き出すのか。善良で、温和で、利発な山崎以外の者は今も存命している。肺病が彼の国の福祉にとってあまりにも早く彼を遠くに連れて行ってしまった。彼は照らすべき光となり、彼がその天才的な存在で讃えられたであろう国の何らかの分野を動かす力となったであろう。みなさん！彼の時をえない墓に評価すべきこの遅れた花を捧げることは私の喜びとするところである。！

話しの口火を切ったのは彼であった。「我々は今どの宗教も信じていない、」と彼は控え目な態度で彼が言葉で表現することを自らに認めたよりもずっと多くのことを常に意味する彼の訴えるような微笑をこぼしながら言った。「仏教は腐敗しており、またその聖職者（＝僧侶）は墮落している。神道は愛国主義に過ぎず、それが神話と昔ばなしだけを教えるので我々にとっては宗教ではない。儒教は少数の訓言でしかない。それは善いものではあるが、しかしそれは我々を鼓吹するものではない。更にそれは中国をそれ自身の水準よりも低く保っている。それが支配する限り、中国は中国が現在あるままであり続けるであろう；また日本は違ったものにならなければならない。」

私は当時のすべての日本人の精神の中にある最高の思想が——日本であると考えた。激烈な愛国主義のあの国において、常に自己は考えるには些細なものであった；しかし私が書こうとしている当時においては、戦火は政策によって堤を築かれくすぶってはいるものの、外国の脅威と攻撃の抑圧の下でなされた理由以上に強烈な熱をもって燃えていた。

伊勢（現在は横井だが）明らかに私の顔色が変わらないので私の考えの一部の特徴を見い出していた。彼の二人の従兄はごく最近、少し遅れて我々の山崎の命を奪ったのと同じ恐ろしい病気で最終的に死を迎えるためにだけアメリカ合衆国の海軍学校から戻ってきていた。横井はむしろ説明的で弁解的な調子で言った：

「先生への我々のこの訴えは、」彼は言った、「純粹にここにいる者の個人的なものです。我々は学習（研究）しています。我々は勉強しています。このことのすべてにおいて我々はあなたに負っています。しかし我々には知ること以外には動機はありません。我々の愛好する科学、我々の愛好する文学；しかしそれをどう処理するかとそれを利用する推進法もしくは処置法を知らないで、知識についての我々の小さな堆積を積み重ねることは利己的だと思われます。多分我々が学んだものの我々の利用を鼓吹し指令することがある種の宗教の目的と義務でしょう。先生をそんなに熱心で、そんなに決意もって、そんなに献身的にしているものは何ですか？我々は我々の性質の中にそうした種類

のものをもちたいと思うし、また我々は彼（＝先生）が他の多くの方法でと同様にあのやり方で我々を援助できると考えております。」

「先生はキリスト教が我々の必要としているものとお考えですか？」と積極的な海老名が無遠慮に詰問した。

「そうだ！そして積極的には否だ！」私は幾分不可解な答を出した。そしてその言葉は爆発する爆弾の衝撃が起こすのと同じように大きな動揺を生み出した。「多くのキリスト教がある。」が低音で順々に伝言され始めた。「我々が考えているのと同じように！多くのキリスト教がある。」彼らは繰り返した；そしてそれから謎を推理しながら終にその提案者に解答を分け与えるようにしている子どものように、懇願するような彼らの凝視は私のところに固定されていた。

「みなさん！私はあなたがたに同意する。」不可避免的に続くに違いない延長された話しをするために訪問者をくつろげるようにした後で、私はゆっくりと始めた。「その生涯を通してあなたがたの血の中に神道の精神が流れています。愛国心はすばらしいものである、がしかしそれは最高にすばらしいものではない。あなたがたは決して愛国的な義務に欠けることはないであろう。私は、あなたがたと共に、今日のあなたがたの国の仏教には単に（人々を）高潔にする影響を考えることには成功しなかった。あなたがたが示唆したように、儒教には鼓舞するものが何もない。それは回転することのない車であり、動くことのない荷車である。それは淀んだ海で動かなくなった船であり、その帆は孔子と彼の注釈者がそれを祖先崇拜の泥の中に錨を下ろして以来決して鼓舞の息によって煽られることはなかった。死と死者は瞑想を鼓舞する対象ではない。あなたがたは私についてくるのか？」

「はい、我々についてはいきます。」彼の周りのすべての者の同情的な態度は確かではあるが、と即座に判断した山崎が熱っぽく同意した。そしてそれからこの最も謙虚だが目立った少年は、息を飲み込まんばかりにして、彼を震え上がらせるほどの大胆さで、自ら進んで申し出た：「我々にはある種の生きるためのインスピレーションが必要なのです。」

「それだ。」私は主張した。「あなたがたにはあなたがたのどの能力とも同じく生命のまた活動の、人間の必要と同じく恒常的で持続的なインスピレーションが必要です。人類の歴史に包み込まれるよりも長い期間はあなたがたが重視する必要はない。あなたがたは永遠性について何も知らないし、またあなたがたの能力は争う余地もなく限られたものである。これらの疑う余地のない事実の認識はあなたがたを正しい方向で遠くへと進めて行くであろう。」

「解りません。」今や小集団の最も熱心な者となっている、山崎が言った；この時からずっと彼は、共通の同意によって認められたスポークスマンとなったが、極めて関心が

深く、極めて鋭い観察をし、よく小集団の心情に融け込んでいるが、しかし極めて知的に冷静で更にまた公正なことで彼はよく知られていた。「どうか先生、説明していただけませんか？」と彼は謙虚に尋ねた。

「私は最初に人類の精神の最も明晰なもののおよび私の判断では半分が、人類の不幸、特にそれ（＝人類）のヨーロッパの部分に対する条件の一部は当然であるという危険をあなたがたに忠告したいと願うだけである。想像力と宗教的感情は共に人類の青年期からの遊ぶ遊び仲間であった。生きている子どもの遊びのように、その戯れの半分は「ふりをする事」からできていた。「――の振りをしましょう」は、子どもの遊びの中のあの表現をご存知でしょう？」

「知っていますとも。」浮田が進んで口火を切った；そして全員が引き込まれて微笑んだ。

「想像力は女の子、浮気女です。宗教的感情は経験の足りなくて、疑られたものとは遠く隔たっている。それはこのようにして想像力の手管への容易な餌食であり続けた。」ここで私の言っていることが明確に解ったのを喜んで、笑った。

「しかし、若い諸君たちよ、」私は最も深刻に付け加えて「人類の想像力と宗教的感情とは両方とも年齢から来るものである。またあなたがたは、率直に理性の支配、歴史の教授およびあなたがたの日常的に観察する事実を否認する情緒と想像によって捕らえられ灰燼に帰す、インスピレーションに対するこの飢えと渇きを許すべきではない。想像力はすべての能力の魅力的なパートナーであり人生の詩情の実り多いプロモーターである。しかし宗教的感情にとって昔話と想像力のきまぐれとふざけを止めるには時間がかかる。それは事実の世界に合致し、それらを愚弄する代わりに科学を教えることを利用し、また娼婦のうさばらしを避けねばならない。欲望は、一度限りのものでありまた永遠のものである。あなたがたのインスピレーションは反対側の角から、即ち義務から来るものであるに違いない。それはあなたがたの同情から流れ、あなたがたの成熟した知性によって養成されなければならない。」

各人の顔色には焦がれるような期待が漲っていた。私のとりとめのない説教の意味の一部を彼らは確かに吸収した。しかしどんなものであれ；それが偉大で無限の問題であり、しかも更に、極めて正確で、積極的な、問題だったのである。だが、どうかしてそれは出会わねばならなかった。平均的な頭脳の市原が彼の直接の詳細な質問を新たにした時に、私が（休憩）時間を嘆願しようとしたいたその時であった：

「すべてのキリスト教のどれが我々にこの生きるインスピレーションを与えるものなのでしょうか？」とかれは明確に詰問した。

「キリストのキリスト教！」と、これまで明確なもしくは限定的な言い方をしなかった言葉で私の意識に関して試みに長い間躊躇していた結論へと公正に導かれて、私は叫ん

だ。私の教え子たちは、予期していたわけではないが、幾分期待していたかのように、とまどったような顔つきをしていた。引き延ばされた休憩の後に、私は焦がれるように私に固定されたすべての少年の凝視に耐えかねて、私は再開した。

「市原君、選択はあなたの質問が含むものよりずっと狭いものである。二つのキリスト教だけがある。」と、彼ら独自の用語を用いながら、私は言った。「もしそれがあの名前をもたなければならぬならば、キリストのキリスト教を採りなさい。とにかく、他にもう一つの、偽物の、偽の代用物がある。急速に大きくなった関心のざわめきが集団を通り抜けた。彼らの期待していた予め準備された形の答が直ちに提示された。その時、彼らは一言でも、もしくは短い概要でも、彼らの答をもつはずはなかった。が彼らはそれを満たされた十分な手段で達成した。花の塊以上の善いものを寄贈されることのない、僧侶の後を這うように歩くこと、利己的な欲望の塵の中で平伏すること、恐怖と迷信のジャングルの中で手探りをするのは、世界がそれなしで永遠にとどまることは必要でもない。解放の日は明けていく。人類にそれほど多くの強烈な悲慘の代価を課した愚行の仮面のすべてにもかかわらず、人間を自由にする真理がなおそこにある——教義もしくは信条の嘲笑においてではなく、事実と人間性の真理において、隷属の精錬された図式によって混ぜものをされず、神学的な庶物崇拜の中の無知の、不合理の、畜生のような信仰の階段を下りと再上昇の非科学的な演出の。しかし祖先が工夫と努力を続ける限り、また赤ん坊がこの惑星の中で母親の愛で養育される限り、それだけ長く熊本私の教え子の工夫の才のある若い精神によって求められ発見された宗教とインスピレーションが人類そのものの憲章の中に永続するであろう。キリストが彼の時代にしたように我々は便利な愚行と迷信の馬鹿騒ぎから自分自身を切り裂かねばならない；その使命を成し遂げるために人間の精神を自由に設定しなければならない；迷信信仰の雲から心情の影響を回復しなかなければならない；また人間性の魂の中での理念、調和した人間性の発達の中で全精神を契約しなければならない。

この方向での私の努力によって、我々は我々の周りの日本人のすべての者が、そうした意味のない儀式と迷信の大きな塊に埋もれている人間性、義務、および尊厳の美しくて完全な主張の例をもち；最もぼんやりとした観察者でさえ注目することに失敗することのないほどに、純粋な人間的な感情は超自然的な偶像崇拜に悪用される。ここに憐れむべきと同じく驚くべき、稀有 (or 異常) な事実がある。しかしながら、今日のこの不正で、偽りで、無能力の仏教がその広く拡がった支配の過程において一度も迫害と殉教の非人間性に対してその制裁を与えられたことがなかった。それはその経歴（歴史）において理想的な共同体の基礎とするために戦われた制度のように、すべての非道、競争および家財の隷属の総計を確立することは一度もなかった。それはどんな形態であれ陶酔させる薬物と飲料の使用に対するその最も積極的な、明確な証拠を与えるのを止める

ことはなかつた。¹⁸⁾

ジェーンズが熊本洋学校の生徒に説こうとしたものは「キリストのキリスト教！」であり、特定の宗派にとらわれない、また人間性の精神と人類の極限の福祉への献身の精神とを保持し、人間性そのものの恍惚にさせるような真理を偉大な師に質し、その真理の覆い包むように装飾しているがらくたを取り除いて知恵の金塊を集めることと断言できる「キリストのキリスト教」なのである。人間愛に支えられたヒューマニズムとしてのキリスト教を信奉すべきと説いたのである。その結実したものが下に掲げる「奉教趣意書」である。

奉教趣意書（花岡山の誓文）

余輩嘗て西教を學ぶに、頗る悟る所あり、爾後之を讀むに益々感發し欣戴措かず、遂に此の教を皇國に布き、大に人民の蒙昧を開かんと欲す。然りと雖西教の妙旨を知らずして、頑固舊説に浸潤するの徒未だ渺なからず、豈に慨歎に堪ゆべけんや、此時に當り、苟も報國の志を抱く者は、宜しく感發興起し生命を塵芥に比し、以て西教の公明正大なるを解明すべし。是れ吾曹の最も力を竭すべき所なり、故に同志を花岡山に會し、同心協力して此の道に従事せんことを要す。

- 一 凡そ此道に入る者は互に兄弟の好を結び、百事相戒め、相規し、惡を去り善に移り、以て實行を奏す可し。
- 一 一度此道に入りて實行を奏する能はざる者は、是れ上帝を欺くなり、如此者は必ず上帝の譴罰を蒙る。
- 一 方今 皇國の人民多く西教を拒む、故に我徒一人此の道に背くときは、衆の誘を招くのみならず、終に我徒の志願をして遂げざらしむるに至る、歎まざる可んや。千八百七十六年第一月卅日日曜日誌すとなん

宮 川 經 輝
古 莊 三 郎
岡 田 松 生*
林 治 定
不 破 唯次郎
由 布 武三郎
大 嶋 徳四郎
藏 原 惟 郭
金 森 通 倫
吉 田 萬 熊*
辻 豊 吉
龜 山 昇

海老名 喜三郎
 浦本 武雄*
 大屋 武雄
 両角 政之*
 野田 武雄*
 下村 孝太郎
 北野 要一郎*
 加藤 勇次郎
 原井 淳太*
 紫藤 章*
 松尾 敬吾*
 金子 富吉
 古閑 義明
 上原 方立
 徳富 猪次郎
 森田 久萬人
 伊勢 時雄
 浮田 和民
 阪井 禎甫*
 市原 盛宏
 川上 虎男*
 鈴木 萬*
 今村 慎始*¹⁹⁾

この「奉教趣意書」は古荘三郎、阪井禎甫との両名が起草し、一同が見てよからうと言うことになって、署名がなされたものである。前文と三ヶ条の行動綱領よりなるが、前文の「人民の蒙昧を開かんと欲す」とか「苟も報國の志を抱く者は、宜しく感發興起し生命を塵芥に比し、以て西教の公明正大なるを解明すべし」という語句は経世済民とナショナリズムへの傾斜が強く出されているし、その大言壮語はエリートを自負し、「生命を塵芥に比し」とか第三条にも拘らず、氏名の末尾に*印を付した者は、その素行により除籍されたかもしくは親類縁者・教師・同輩からの説得という名の脅迫でその盟約を破棄せざるをえなかったのである。

蘇峰はこの盟約に加わる経緯を次のように回顧している。

扱予は何事にあれ新しいことはあまり好まない性質であるが、その時分から本を読むことは好きであり、しかも漢學には聊か自信があつたから、漢文に翻譯したる舊約

書や新約書を貰ひ受け、少しばかり読んでみた。なかなか面白さうであつた。元來予は實學連生抜きの者にて、『四書』の講義は父からも聴き、又た『大學』の講釋にかけては當時第一人者と稱へられたる、竹崎先生の講釋も聴いてみたが、實のところ、予の魂を捉ふる程のものはなかつた。ゼンスは四年以上も日本にゐたが、絶対に日本語を用ひず、彼は生徒に教ふるにも英語のみでやつてゐたから、彼の説教や談話なども、固より予には解らう筈もなかつた。併し上級の横井時雄——當時は伊勢——や、金森通倫が、ゼンスの意を受けて話すことはよく判つた。兎に角實學連の『大學』の講釋に比ぶれば、聖書の講釋の方が何やら面白くもあり、且つその方の仲間が寧ろ學校では賢明にして、有力なる分子らしく覺えたから、自然その方に近付くことゝなつて來た。ゼンスも初の間は餘程遠慮をしてゐたが、最早彼の任期も満ち、遠からず引上ぐることゝなつたから、彼も傍若無人にその所信をやつてのけたものと思はるゝ。斯くて明治九年の初めであつたと覺ゆるが、世間で名高き花岡山の申合せが出て來つた。

花岡山の申合せなるものに就いては、予は初からその申合せに與つたものでもなく、且つ予の年齢もやうやく十三、四にして、當時予より六七歳以上の幹部などとは、年齢の上にも懸隔があつたので、謂はば予は陣笠の一人として參加したに過ぎない。併し世間では特に予の名なども主なる一人に擧げてゐるが、それは有難迷惑にて、實に幹部といふ幹部は上級生の數輩にして、あとは附和雷同したに過ぎなかつた。予は當時固よりキリスト教の事を研究したといふではなく、唯だ黴の生えたる「大學」や「論語」の講釋よりも、何やらこの方が面白いやうに心得たる迄であつた。謂はゞ實學黨の殻からをどり出す爲に、その仲間に加つた迄にて、それ以上の意味はなかつた。然るに仲間に加つた連中はやがて種々の物議が起つて、そろそろそれをやめたが、予はかねての氣質にて、一度やりかゝればゆく所まではゆくといふ決心であつたから、後までも踏止つたのである。それで予も花岡山の連盟者の一人として、記憶せらるゝことゝなつた。併し予の眞意は今申す通り、深くキリスト教を研究して、それを信じたのではなかつた。固よりキリスト教の爲に一生を捧るといふ了見は、露程もなかつた。唯だ他の者がやめるから、意地にもやめずにゐたのであつた。²⁰⁾

父や竹崎律次郎という実学党から受けた「四書」の講釈に比べて聖書の方が面白く、実学党の殻から躍り出すために仲間に加わつた迄にて、単に附和雷同したに過ぎない一陣笠的な構成員として參加したのである。その上熊本洋学校の設立・維持に苦心を重ねているのは実学党の構成員であり、彼らはその理念を実現するために熊本洋学校で後継者を育成しようと願つていたのであり、他方で「實學黨の先輩横井小楠先生の如きは、耶蘇教を信じたといふ理由の下に暗殺された位で、實學連には、耶蘇教といはれることは最も禁物であつた²¹⁾」という事情もあり、「實學黨の諸々の家庭は、社會に對して重大なる責任を感じた²²⁾」のである。それ故に「耶蘇教を信じたと云はれては、天下に對しても、

家に對しても面目がないといふ事にて、此に於て所謂の迫害なるものが起つた²³⁾のである。

迫害は凄まじいものであった。金森の言を借りれば

「或ハ懐劍ヲ以テ汝耶蘇ヲ捨テズバ我ハ自害セン責メラル、モノアリ 或ハ劍ヲ抜キテ汝耶蘇ヲ信ズルト云ハ、我ハ只今汝ヲ兩斷スト迫ルモノアリ此際ニ當リゼンス師ハ何ヲナセシカト云フニ只書生ヲ勵スノ一事アルノミ 心弱ク力弱キモノ先生に來リテ失望スルモノアレバ撃案叱呼シテ曰ク嗚汝主義ノ爲ニ死スル能ハザルカ 若シ然ラバ寧口死スルニ如カザルナリト 一夜既ニ深キノ時先生ノ門ヲ叩クモノアリ 當時迫害盛ナリシカバ先生思ヘラク己ヲ暗殺セントスルモノナリトピストルヲ用意シテ二階ヲ下リ行ケバ是二人ノ書生ノ迫害堪ル能ハザルヲ告グルニ有シカバ相共ニ火モ點ゼザル暗室ニ於テ暫ク祈禱ヲ捧ゲント云フ 此時氏ハ實ニ非常ノ通苦ヲナシ玉ヘリ 而シテ其夫人ハ吾人ノ之ト相面スルコト三年間一度位ナリト雖モ人ノ見ズ知ラザル處ニテ非常ノ涙非常ノ祈非常ノ助ヲ以テセラレタリ 當時堅ク一團結ヲナシタルハ十九歳ヲ長トナシ十三歳ニ到ルノ青童ニシテ二十人餘ナリ 以前四十人ノ者迫害ニテ三十人足ラズトナレリ 迫害引續クコト半年人々信仰ヲ奪フベカラザルヲ了リ 或ハ放逐スルモノアリ 或ハ自由勝手ニナサシムルアリ 九年ノ夏全科卒業シ三十名ノモノ同志社に來リ勉強スルコトトハナリヌ²⁴⁾」

というものであり、蘇峰の言では「迫害の最も劇しかつたのは、横井及び金森であつた。金森は予の伯母三村家との親戚関係よりして、専ら三村家に於て迫害せられ、横井は又た堀端の家に於て迫害せられたが、吾家にも竹崎先生などは、駕籠にて夫婦連れでやつて來、随分物々敷くあつた。²⁵⁾「母不孝者」と罵倒され、父親に「切腹する」と脅迫されたりしながらも、「英語約翰傳の小冊子を犢鼻褌に隠し持ち、家人の目を盗んで、朝夕之を耽讀し、徒然の餘りには友を思ふて、此の本の餘白のあらん限りに、鉛筆もて、エビナエビナとローマ字で書いて居られたそうです。」²⁶⁾金森の挙げたエピソードについてジェーンズ自身は次のように綴っている。

迫害のユニークな形態の衝撃的な例が話されるであろう。これは伊勢の、今では横井の、例である。彼の父は心優しい男であり、有能であり、本性において高貴でまた日本が産してきたと同じく心情において純粹であつた。思想的な指導者であり、運命の、国家の案内人で鼓吹者であり、長い間、彼はギリシア精神指導者とギリシア哲学の提唱者のやり方にならって彼自身の修養の学校を公式に指揮した。少年は私に「父はこのキリストの真理そのものを存命中に予期し教えた。私は彼のことを彼の時代に先立って現実に真実にキリスト教徒であると思う。彼の精神と心情は人間性に対するこの同一の情熱で満たされている。」革命の時に京都に呼ばれ帝国の参事官とされたので、彼は暗殺された。息子は、我々の熊本での組織の後数年経て京都の寺町の北端の神社の前で休息し、

彼の父の身体が乗り物（＝駕籠）から引きずりおろされ6本の刀で刺されていた石畳をの地点を指摘した。

彼の親がそうであったので、少年はキリストのキリスト教の中に彼の父の生涯を通じての教えの本質を認識し、彼の心情と精神と身体をその異化にその民衆の新生活の積極的な旅立ちと人間性の確実な希望を与えた。しかし、その男の内面的な心情を知らない他の者は、その少年の新宗教への帰依に背かれ、もしくは背かれたように気どった。これらのことが彼の母と祖母の家庭の誇りに火をつけて不満と絶望の炎へと燃え上がらせた。ある晩私は下からの呼び声で午前一時頃眠りから起こされた。呼び声は繰り返された。起き上がらないで、私は訪問者である、伊勢とその友人に、入って二階の私の部屋まで来るよう命じた。彼らの使命は最も緊急なものであった。家族会議が招集され今伊勢の家で開かれている。親戚と友人たちが「キリスト教」へのその哀れな少年の墮落（改宗）に関する討論に熱をあげていた。一晩中そのことが更に討議されて、尋問から次の結論が引き出された：母は罪滅ぼしの切腹をしなければならない。自殺（切腹）の準備がその時に進行中であった。自分自身の死に対する厭わないで、哀れな母は苦悶していた、というのは彼女の息子の他に母なし子にされてしまう娘がいたから。

この時に際して私は中断した。私には一刻の猶予もないことが解っていた。私はこれらの人々の緊急の事態を知り、また私は母親の美しい性質、温和で謙虚な本性を知った。「行け！」私は命令した。「直ちに県庁へ行け。そこであなたがたが接触できる最高位の役人を起こしなさい、できれば警察の長官を、探しなさい。もしできなければ、あなたがたがつかまえることのできる最高位の役人にこの報告書を届けなさい。私の名前で役人が直ちにあなたの家に派遣されるよう命じなさい。一瞬たりとも疑ってはなりません。彼（役人）が一言で集会（家族会議）を解散させるでしょう。彼は、法律が彼に、彼ができるときには、犯罪を防止することを強いているので、それをしなければなりません。今すぐに、できるだけ速く行きなさい。あなたは母親を助けられるかもしれません。」

彼らは行った。県庁では明かりがともされていた。委託された役人は部下を派遣した。家族会議は急いで大騒ぎのうちで解散させられた。年老いた高崎（誤記竹崎茶堂律次郎）、出席していた親類の一人であったが、後に自分の非を認めて告白しており、四冊の注釈書で儒教に心髄まで浸透している中国古典の年老いた教師に可能であるような文明化された人間性のより広範で、深い図式への完全な改宗者となったが、息子の単純で熱心な説明はキリストの名前から古い墮落（改宗）の痕跡を動かしたばかりではなく、その息子の熱意に勝る献身で高貴な婦人の魂を虜にした。彼女はそれ以来きわめて女性らしく献身の知覚の鮮明さと強烈さで愛と財宝に対して二つの名をもった。母、祖母、および妹が間もなくキリスト教世界の利便なそれとはかなり異なった意味でのキリスト教徒となった。

前章で話された環境は私の上に極端でほとんど我慢できない途方にくれさすほど痛ましい重い責任を与えた。その後の他の事件はただ私の当惑を加えるだけであった。学年が終わりに近づくとつれて、一部の少年の状況は極めて危険で悲惨なものとなった。数人は事実上孤児（勘当）にされた。私のいう孤児は面目を汚す両親の嘲りもしくは無関心によって毎時間更新されたので、死の終結よりも悪い種類のものであることは強調されすぎることはない。一人以上の少年が両親の息子に対する関係がなくされたこと；日本の歴史の中で他者とそれを共同することによって家族の名前（家名）を敢えて汚す少年に対してそれ以上になされることはないこと；を理解するよう伝えられていた²⁷⁾。

横井時雄の母つせ子は時雄に対して「汝は横井小楠の獨子で父の志を繼がねばならぬ者であるのに、邪教に迷ふ杯とは以ての外の心得違ひである。併し汝を此様な不心得者にしたのは母の責任で亡き夫に對して甚だ相済まぬことであれば、汝母の忠告を聽入れない以上母は自害するより外に道がない²⁸⁾」と時雄に棄教をせまったのであり、その脅迫じみた説得にも拘らず時雄の態度が変わらないのを見て、短刀を取り出し自殺の勢を示して一家は忽ち大騒動となり、婢が大声で助けを求めたのを聞いたジェーンズの教え子が聞きつけて、ジェーンズの許に駆けつけ、ジェーンズの機転により県庁の役人（その中には熊本洋学校幹事野々口爲志もいた）が駆けつけて、家族会議を散会させ、騒ぎをひとまず抑えたのであり、それ以後時雄は暫く家に監禁されたのであった。また小崎は次のようにも回顧している。

先ず先輩の説諭が第一に参りました。特に他の人は兎に角小崎と金森丈は何處迄も士だと信頼し切って居られた儒教の先輩も金森さんの改信には全く力を落としました。（小崎さんの改信は少し遅れました）金森さんは忽ち自宅に呼び歸され、先づ竹崎茶堂先生の訓誨がありました。先生は懇々と聖賢の道を説き、人は之を奉じて苟も邪教に迷ふてはならぬと諭されました。金森さんは黙って之を聞いてみたが、終つてから突然『先生はバイブルを御讀みになりましたか』と尋ねた。先生色を成して『何で邪教の本など讀むものか』と答へられた。金森さん、すかさず『先生の大學の講義で致知格物の章を伺ひますと、事は空想ではいかぬ。實物に當つて究めなければ眞理は判らぬと教へて下さいました。宗教は實地に當らず邪教邪教と何うして判りますか』と尋ねた。先生答ふる所を知らず、『馬鹿者下れ』と怒鳴つて席を蹴つて立たれた。……竹崎先生の訓誨も功が無いので之ではならぬと家人は金森さんを座敷牢に打込み、耶蘇教の書類を全部取上げて仕舞つた。英語約翰傳の小冊子を犢鼻褌に隠し持ち、家人の目を盗んで、朝夕之を耽讀し²⁹⁾たという。

説諭・訓誨・監禁・脅迫等が通じないと見るや、結盟者への妥協案として「信仰の儀は各人の胸中精神上の事であつて、他からは如何とも仕方が無い。之は各人の自由に任ずる他は無い。唯、一つ時雄さんに望む所がある。耶蘇坊主に丈は成らないで欲しい。

坊主にさへならないなら、我等として何も言ふ事は無からう³⁰⁾」と信仰の自由を認めたいう
えで耶蘇坊主にならないと誓約させ、前途有望な彼らのために東京・京都へと遊学させ
ることになる。

既に「奉教趣意書」の中で、行動綱領の特質として信仰そのものよりヒューマンイズム
の立場に立った行動の規制を掲げていることを見るとともに、エリートとしての自負心
に燃え、ナショナリズムへの傾斜が伺える事を指摘した。いま一度この点を考えるため
に「札幌バンド」の趣意書と比較して見よう。

耶蘇の信徒の誓約

札幌農學校に於ける下に記名する所の輩、其の命令に従ひて基督を告白し、十字架
の死により吾等の罪の贖ひをなせる所の祝福せらるべき救主に對し吾等の愛及び感恩
の情を表はさんが爲め、眞實基督教徒たる諸々の義務を盡さんことを志し、且つ基督
の榮光の益々顕彰せられ、其の之が爲めに死せる所の人民を救拯せられんが爲め、人
類の間に基督の王國の擴張せられん事を熱心に冀望し、自今以後彼の忠信なる弟子と
なり、嚴格に其の教訓の文字及び精神に服従して生活せん事を、肅しく神に誓ひ、吾
等互に相約す。而して若し適當なる機會に際する時は、試験を受け、洗禮を領し或る
福音主義の教會に加入すべき事を契約す。

吾等は神が人に言語を以て顯せる唯一なる直接の天啓として、且つ幸なる來世に伴
ふ唯一なる完全にして謬なき導きとして、聖書を信ず。

吾等は恩寵深き父、義なる統治者、最後の審判者として、唯一なる永遠の神を信ず。
吾等は誠實に悔改め、神の子を信ずる事によりて其の罪惡の赦を得たる者は、すべて
聖靈を以て幸福に其の全生涯を誘掖教導し、且つ天父の周到なる攝理を以て守護せら
れ、遂に救はれたる聖徒の喜びと其の業を繼ぐに至るべきことを信ず、然れども福音
の招きに與るを拒む者は、すべて彼等己の罪に於て滅び、又限りなく主の前より罰せ
られざることを得ずと信ず。

左の戒訓は造次にも顛肺にも吾等が地上に生活する限り、之を記憶し之を遵守せん
ことを契約す。

- 一 心を盡し、精神を盡し、力を盡し、意を盡して主なる爾の神を愛し、又己の如く、
隣を愛すべし。
- 一 偶像または造られたる所の生ある物若しくは生なき物に模型れるものを拜する勿
れ。
- 一 妄り主なる爾の神の名を呼ぶ勿れ。
- 一 安息日を記憶して之を聖く守り、必要なる務めの外は成るべきだけ聖書を研究し、
自他をして聖き生涯に進むの準備の爲め、専ら此日を過すべし。
- 一 なんぢの兩親及び政權を有する者に服従し、且つ之を尊重すべし。

- 一 謀殺、姦淫、又は其の他の不潔なること窃盜、詐欺を犯す勿れ。
- 一 爾の隣を害す可らず。
- 一 斷えず祈るべし。

互に相扶け相勵まん爲め、吾等は『耶蘇の信徒』と稱する團體を結び、起居を共にする間は、聖書又は他の宗教書及び新聞を読み、或は會議をなし、或は祈禱をなさんが爲め、毎週一回以上忠實に相會合せん事を契約す。又吾等の愛心を活動せしめ、吾等の信仰を堅固ならしめ、之を知る事によりて救はるべき眞理を益々明かならしめんが爲め、聖靈吾等の心中に現存し給はん事を眞實に冀望す。

千八百七十七年三月五日

黒岩 四方之進
伊 藤 一 隆
山 田 義 容
佐 藤 昌 介
内 田 澁
田 内 捨 六
中 島 信 之
大 島 正 健
渡 瀬 寅次郎
柳 本 通 義
小 野 兼 基
佐 藤 勇
安 田 長 秋
出 田 誠太郎
荒 川 重 秀
小 野 琢 磨
太 田 稻 造
佐久間 信 恭
宮 部 金 吾
足 立 元太郎
高 木 玉太郎
廣 井 勇
内 村 鑑 三
町 村 金 弥
南 鷹 次 郎

藤田 九三郎
村岡 衆一
諏訪 鹿三
岩崎 行親
伊藤 英太郎
伊藤 鏗太郎³¹⁾

この「耶蘇の信徒の誓約」は、全文が英語で上述のアメリカ人基督信徒科学者(William Smith Clark 1826~1886)によって作成されたものであり、どこか極端な禁酒論者が手に負えない酔払いを説き伏せて禁酒誓約に署名をさせるやり方であった。余はついに屈した。余が英語の最初のレッスンを教わった一老英国婦人は余の教会行きを非常に喜んだ、研究(truth-seeking)ではなくて見物(sight-seeing)が余のいわゆる『日曜日の居留地遠征』の唯一の目的であったという事実に気づかずに。余は早くから我が国を万国以上にあがむべきこと、我が国の神を拝して他のいかなる神をも拝しないことをおそわった内村も上級生の宗教的情熱と伝道の精神に基づく宗教の突貫による説得に屈服して回心したのであった。この内村の回心にはクラークの招聘に当たっての黒田清隆とクラークとの会談に端を発する。明治九年七月に來日したクラークは黒田清隆開拓使長官と札幌學校に合格した官費生11名と共に御用船玄武丸で小樽に向けて出帆した。船中にて、黒田はクラークに Highest morality を學生に教えて頂きたいと依頼したのに対して、“I know no morality except Christianity.”³⁴⁾と答え、黒田は「是れ余の賛同する能はざる所なり、我にも儒教あり、神道あり、何ぞ必ずしも外教を用ゆるの要あらん、君余の學生に教ゆるに倫理を授くるも可なり、然れども彼等に耶蘇教の聖書を教ゆるに至りては余は堅く之を謝絶せざるを得ず」と、これに答えてクラークは、「若し然らば余は道德を教へざるのみ、余の道德は凡て聖書の中に存す、聖書を離れて余は道德を教ゆる能はず」と。船は小樽に着き、一行は札幌に入ったが、両者の合意は見られず、終に黒田は「君終に君の意を曲げず、余は今如何ともする能はず、余は君に告げんと欲す、余は君に聖書を學生に授くるの許可を與へんと欲すと、唯君願くば餘り公然に之を爲す勿れ」と言い、クラークは「君に謝す、余は明日より倫理を余の學生に講ずべし」と答えた。クラークは毎朝授業前に聖書を朗讀し、基督教の信仰を説き、主の祈りを捧げて授業に取り掛かった。彼は校則を一切廃止し“Be Gentleman!”の一条だけを掲げて、自ら模範となり、人格的教育に全力を傾倒した。³⁶⁾内村は札幌農學校の第二期生として入学したが、入学手続きを済ませた後で『我等下に署名する札幌農學校の教職員學生は、學校と關係ある限り、醫藥の外如何なる形に於ても、阿片、煙草並に酒類の使用を嚴禁することをここに嚴に誓約する。又併せて賭博並びに神の名を瀆す事なきを誓約す』に署名する事を求められ、署名を済ますとホイラー教授から『諸君がこの誓約書に署名されたことを感

謝します。ところでクラーク氏が學生に與へてくれと、残し置かれましたバイブルがあります。是非とも、これをよく讀んで欲しいのです。」と言って18人の新入生全員に一冊宛分配したのであった。³⁷⁾

「奉教趣意書」と「耶蘇信徒の誓約」を比較すると第一に、その作成者が生徒であるか外国人教師であるかという点に、二つ目にその署名が自発的になされたのか半ば強制的になされたかという点に求められよう。それはジェーンズが科学（天文學ないしは幾何學）の延長としての宇宙の秩序の説明として創造者としての神の由来を説くに始まったのに比し、クラークは Highest morality をもつテクノクラートの育成のための基盤として公然とキリスト教の立場に立った教育（知育ばかりではなく訓育をも含めて）を行なう事ができたという状況の差異に因るものであろう。“Be Gentleman!”と行動規範の確立を求め、耽溺の危険をふまえての禁酒・禁煙・禁阿片という薬物の無用な摂取を規制する「禁酒運動」につながる倫理観によるものといえよう。内村がシニカルに「極端な禁酒論者が手に負えない酔払いを説き伏せて禁酒誓約に署名させるように」強制したという言葉に端的に表明されているのであろう。第三に「奉教趣意書」は「大に人民の蒙昧を開かんと欲す」とエリート意識に立った布教・伝道を志すのに対して「耶蘇の信徒の誓約」は「信仰を堅固ならしめ、之を知る事によりて救はるべき眞理を益々明かならしめんが爲め、聖靈吾等の心中に現存し給はん事を眞實に冀望す」と一信者としてキリスト教に帰依した「適當なる機會に際する時は、試験を受け、洗禮を領し或る福音主義の教會に加入すべき事を契約す」と福音主義の教會への加入を義務づけていることが特筆されるべきである。第四に前者の行動綱領では、包括的で倫理的色彩が濃く、単に基督教徒として信仰を支え合う信者の結社としての倫理観を強く打ち出しているのに対して、後者では「モーゼの十誡」に倣ったものかと思われる程同趣旨の項目が並び、ただ最終項目の「斷えず祈るべし」が新たに加えられているのと、第一項にキリスト教の説く隣人愛が書き加えられていることである。いわば「モーゼの十誡」に立脚した新たな誡律を設定したのであり、キリスト教の倫理観をしっかりと位置づけられていることが特色であろう。また「汝の兩親及び政權を有する者に服従し、且つ之を尊重すべし」の項目には、キリスト教の信仰とは異質な項目であるが、クラークの着任に際して同行した黒田清隆のキリスト教教育の黙認への感謝の意をもつものであったのではなかろうか。

註

- 1) 徳富蘇峰著『蘇峰自傳』(佐波亘編『植村正久と其の時代』より孫引)
- 2) 徳富蘆花著『竹崎順子』一四一頁
- 3) 徳富蘆花著 前掲書 一四四～五頁
- 4) 山崎正董編『横井小楠遺稿』七二六頁(題は「送左・大二姪洋行」この後に有逆於心勿尤

人 尤人損徳 有所欲爲勿正心 正心破事 君子之道在脩身と続く。)

- 5) 徳富蘆花著 前掲書 一四八頁
- 6) 小崎弘道著『七十年の回顧』(佐波亘編 前掲書より孫引)
- 7) 小崎弘道著 前掲書
- 8) 明治二十二年七月文學會雜報 (佐波亘編 前掲書より孫引)
- 9) Capt. L. L. Janes “Kumamoto, An Episode in Japan’s Break from Feudalism” (同志社々々料編集所『史料彙報』第4集 p.25)
- 10) Capt. L. L. Janes op. cit pp 25~26
- 11) Capt. L. L. Janes op. cit p. 27
- 12) 徳富蘇峰著 前掲書
- 13) 徳富蘇峰著 前掲書
- 14) 「正義派」といわれる反キリスト教の立場に立っていた者で、「西教派」が花岡山で「奉教趣意書」に署名した上で集会を開いた時に、反キリスト教の集会に参加した者は吉田作弥、上野己熊、上塚豊、山田謙次、浅嶋光、菅沼某、福田敬四郎、両角政之、大坪一郎、町田波太郎、松村某、上野文男、森川某、渋谷太郎、太田黒哲堂、高橋某、福嶋綱雄、神田基培、三浦某、岡田源太郎、竹原健次郎、郡徳隣、松岡貞志、桑原丘為、樫木野九郎平、安田弥蔵、川越亀齡、横井時敬、東淳吉、小嶋知新、野村普、山中某、高道竹雄、他三名の36名であるといわれる。辻橋三郎「奉教趣意書の成立とその後」一八三頁 (同志社編『熊本バンド研究』所収)
- 15) Capt. L. L. Janes op. cit pp 45~46
- 16) Capt. L. L. Janes op. cit pp 54~56
- 17) Capt. L. L. Janes op. cit pp 58~59
- 18) Capt. L. L. Janes op. cit pp 59~62
- 19) 佐波亘編 前掲書 五四一頁 (*は安丸良夫・宮地正人編『宗教と国家』<日本近代思想体系5>より補った)
- 20) 徳富蘇峰著 前掲書
- 21) 徳富蘇峰著 前掲書
- 22) 徳富蘇峰著 前掲書
- 23) 徳富蘇峰著 前掲書
- 24) 金森通倫『文學會雜報』明治二十二年七月 (佐波亘編 前掲書より孫引)
- 25) 徳富蘇峰著 前掲書
- 26) 小崎弘道著『ともしび』昭和十一年一月 (佐波亘編 前掲書より孫引)
- 27) Capt. L. L. Janes op. cit pp 72~74
- 28) 小崎弘道著『七十年の回顧』(佐波亘編 前掲書より孫引)
- 29) 小崎弘道著『ともしび』昭和十一年一月 (佐波亘編 前掲書より孫引)
- 30) 同上
- 31) 佐波亘編 前掲書 五四一~三頁 (氏名は内村鑑三著『余は如何にして基督信徒となりし乎』二四〇頁で補った)
- 32) 内村鑑三著 前掲書 二十二頁
- 33) 内村鑑三著 前掲書 二十頁
- 34) 佐波亘編 前掲書 五四七頁
- 35) 内村鑑三著「黒田清隆逝く」『福音新報』第二七二号 <明治三十三年> 所収 (佐波亘編前掲書より孫引)
- 36) 佐波亘編 前掲書 五四八頁
- 37) 佐波亘編 前掲書 五五〇頁